京都橘大学
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY

# 公募推薦 直前対策講座
# 【基礎テスト対策 国語】

２０２４年９月

講師：青木 新吾（代々木ゼミナール）

# ２０２４年度　京都橘大学　公募推薦直前対策講座　国語

**【傾向】**

京都橘大学の入試の国語は、現代文（評論）と国語常識の大問４題で構成される。そのすべてにおいて、標準的な学力がいかに定着しているかが試されるようになっている。

文章題については、高校３年生であれば読んだことがある、ないしは、読めるであろうものが出題され、設問は、接続詞、空欄補充、傍線部説明、内容一致など、記述以外の私大客観マーク形式における全てのパターンが用意されている。本文全体を余すところなく問う形となっており、キチンと文章を読むことが要求される。国語常識については、文学史、四字熟語、漢字まで、隅々まで問われる。

試験時間は、英語と合わせて８０分となっている。国語としては、現代文と国語常識の全てに取り組むには十分な制限時間であり、一つ一つにじっくりと向き合うことができるだろう。

**【対策】**

大まかなことを記すと・・・

学校の教科書に載っている文章は読めるようにしておこう。授業で扱われなかったものに関しても、時間を作って読んでみてほしい。論理展開をしっかりと追いかけながら、分からない語句が出てきたら、必ず辞書を引き、その場で頭に意味を叩き込んでいこう。

過去問をメインにして演習に取り組もう。加えて、「実践演習現代文　標準」（桐原書店）や、「大学入試　全レベル問題集　現代文　３私大標準レベル」（旺文社）など、標準的な問題集を１冊は仕上げておきたい。その際にも、出てきた漢字や語句について、分からなければ、その都度辞書をひいて覚えていくこと。

読解の途中で辞書を引く習慣だけではなく、国語常識をクリアするために、漢字の問題集は1冊仕上げておこう。２０００程度、意味が記されているもの、であれば、大概は問題ない。そういう問題集であれば、巻末に四字熟語、ことわざ、慣用句まで載っており、完璧に仕上げることで十分対策になる。

文学史については、薄い文学史の問題集、さらには「国語便覧」を必携したい。数ある文学作品は全て読めるものではないが、「国語便覧」は、著名な作家の有名な出典がコンパクトにまとめて説明されている。問題集と合わせて、明治以降の作家のページは、ことあるごとに読み込んでいこう。

京都橘大学の入試で問われる内容は、例えば、生きていく上で「漢字」から逃れることはできないように、入学のためだけでなく、今後の人生でも役に立つことが多い良問である。これを機に、これから生きていく上での糧を身につけるきっかけとしてほしい。

各設問に対する「具体的な」対策は、この後の授業で・・・

**Ⅰ**　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。【２０２３年度 学校推薦型選抜（基礎テスト）１１月１６日実施】

1　いまわれわれの周りには死が氾濫し、日常化しています。未曽有の大震災によって瞬時にして失われた何千何万もの命、制御不可能なまでに暴走してしまった原発から発せられる放射能によって日夜脅かされつづける膨大な数の命。しかし、かりにそういう破局によってもたらされた**A**な死がなかったとしても、死はやはりわれわれの日常の一部であることをやめません。私個人にかぎってみても、このところ母をはじめとする何人かのかけがえのない肉親や恩師、それに友人たちの死を経験しました。少しさかのぼれば、わが子の死産や教え子の自殺などというやりきれない死もありました。そうしていまでは自分もまたやがて彼らと同じようにいずれは死んでいく身であることを思い知らされています。**あ**こうしたことはなにも私だけにかぎったことではありません。それは例外なくだれの身にも降りかかること、避けられないことです。だからこそ人は問いつづけてきたのです、死とは何かと。(①)

2　しかし皮肉なことに、その事態のまっただなかに立つ当事者である死者はそれを問うことができません。**い**人は生きるかぎりにおいて死を問うほかありません。しかし生が死を問うとはひとつのパラドックス以外の何ものでもありません。死は生にとってはどうにも声の届かぬ「彼岸」だからです。それはそもそも生の側からは語りえないものと言うことができるかもしれません。こうして死はわれわれの日常において不断に遭遇する近しい出来事でありながら、基本的に「語りえぬもの」として遠ざけられ、忘れられていくことになります。それは多くの場合「諦め」という名のもとにおこなわれています。処世のわざとしては、じじつそうするよりないのかもしれません。しかし私にはこの自明の事実がときに疑問になることがあります。本当に死は語りえないものだろうか、**う**われわれはこの生死のパラドックスに耐えて、いったいどこまでそれを語る努力をしてきたのだろうかと。

3　少し理屈をこねてみましょう。分析哲学の元祖のようにあつかわれているウィトゲンシュタインの「論理哲学論考」のなかに「語りえぬものについては沈黙しなければならない」という有名な言葉があります。この言葉はその昔から伝わる「オッカムの剃刀（しんげん）」と呼ばれる原則、つまり「説明のためには必要以上の仮定を立ててはならない」と同じように、いまや合理的に思考するための箴言のようなものとして出回っていますが、しかしこの言葉はけっして「語りえぬもの」を少しでも「語りうるもの」にしようとする人間の努力そのものまでも否定しているわけではありません。知の進歩はほかならぬその「語りえぬもの」へのあくなき挑戦にこそあるのですから。われわれはむしろこう言うべきでしょう。ほかならぬ語りえぬものこそ知の温床であると。ただ語りうるもののみを語るというのであれば、それは結局のところ発見も何もないわかりきった同語反復（トートロジー）をくりかえす以外ありません。「ウィトゲンシュタインに逆らって、語りえぬものをこそ語るべきだ」と述べたアドルノはさらに、こうも言っています。

認識のユートピアは、概念なきものを概念でもって開きながら、なおそれを概念として等置してしまわないところにあるのだろう。

（『否定弁証法』）

4 語りえぬものへの挑戦を［B］にもっとも象徴しているのは「atom」という言葉でしょう。日本語では「原子」と翻訳され、輸入されているわけですが、これはもともと否定の接頭語「ἀ」と動詞の「τομέω」からなるギリシャ語の「ἄτομος」に起源をもち、「（これ以上）分割されないもの」ほどの意味でつかわれていた言葉です。あえて語源に即して翻訳するなら、「不分子」とでもなるところでしょうか。これを特殊な哲学用語としてつかったのがイオニアの自然哲学者デモクリトスであるとは、哲学史の教科書などでもよく触れられていることです。（②）

5 注意したいのはこの言葉の一部をなす否定の接頭語「ἀ」です。これは後のヨーロッパ語、たとえばラテン語の「in-」やドイツ語の「un-」などに転換されて引き継がれていくわけですが、「atom」ではそのままギリシャ語の原形が残ったことになります。いずれにせよ、ヨーロッパ語のなかにはこの「a-」「in-」「un-」を接頭語にもつ言葉が少なくありません（ちなみにこれらを日本語で表現するときは「不-」「否-」「非-」「未-」「無-」「脱-」などという表記がそのつどの文脈におうじて適宜つかわれているようです）。（③）

6 周知のように「atom」すなわち「原子」は、今日ではもはや「分割不可能なもの」ではありません。それどころか、二〇世紀の物理学の劇的な展開が示したように、それは次から次へと分割されつづけ、ついにはその「物質」としての［C］さえもが疑問に付されるところまで進んだのでした。またその中身の構造が解明されると同時に「原子力」などという不吉でやっかいなものまで生み出してしまったことも周知の事実です。つまり、初めはたんに「分割されないもの」とネガティヴにしか表現できなかった概念が、その後の知的挑戦によってそのネガをポジに変えられた典型例がここに見られるのです。日本語の「原子」という表記がヨーロッパ語のような否定形をもたないのは、それがポジに転換して以後の輸入概念であることを示しています。

7 この「atom」によく似た言葉にもうひとつ「individual」という言葉があります。こちらはラテン語が起源となっていますが、文字どおりにはこれも「分割されないもの」で、言葉の組成上は「atom」と同義になります。ところが、同じような語源的意味をもちながら、こちらは「atom」とは別の文脈であつかわれてきました。すでに述べたように、「atom」が物理学を中心とする分野でその内容の［D］と、その結果としてのネガからポジへの変転を経験したのだとすると、「individual」のほうは、どちらかというと社会科学、生物学あるいは哲学といった分野でその進展を見たのでした。おおまかに言えば、日本語で「個人」と訳される場合は社会科学的文脈が、「個体」と訳される場合は生物学的文脈が問題になるようですが、哲学ではどちらの訳語もつかわれているようです。明らかにこの概念もま

た当初の「分割されないもの」という否定的表記を超えて、ポジへの転換を果たした概念です。げんに今日のわれわれは「individual」という言葉を「分けられないもの」などというネガティヴな意味合いではつかっていません。［え］それは人間存在の原点となるようなポジティヴな何ものかとしてとらえられているのではないでしょうか。日本語の「個人」という翻訳語もまたその転換後の産物ですから、初めからポジティヴな意味合いを含んだ「固」をツクリにもつ「個」というような表記が選ばれているのです。（④）

［8］興味深いのは、この「分割されないもの」という原義をもった「原子」と「個人／個体」がはからずも近代という時代になって並行してその概念の進展を見たということです。類似の表記構造をもつ二つの言葉が、かたや物質ないし自然のベースとして、かたや人間ないし社会のベースとして、いわばグランドセオリーの基本概念としてつかわれていったこと、そこに「近代的パラダイム」と呼ばれるものの思想的ないし哲学的特徴があると言ってもいいでしょう。言い換えるなら、原子という表象を要素とする機械論的な思考モデルがそのパラダイムの内容をなしていると言っていいかもしれません。（⑤）

［9］思想や理論の歴史をこういう観点からふりかえってみたときに、無視して通り過ごすことのできない際立った例がまだひとつあります。それがフロイトの切り開いた精神分析という分野です。精神分析は基本的には「Bewußtsein 意識」と「dasUnbewußte 無意識的なもの」を区別することに始まります。注意してほしいのは、フロイトは「意識 Bewußtsein」の対概念にけっして「Unbewußtsein」という表記を当てていないことです。日本語で無造作に「無意識」と訳されてしまうことが多いのですが、原語はあくまで un-という否定を意味する接頭語のついた形容詞形「unbewußt」を名詞化した「das Unbewußte」、つまり「意識されないもの」または「無意識的なもの」です。これはいまでは精神分析の用語として定着していますが、この表記法からも推察できるように、フロイトは当初これを意識のネガとして想定し、そこから自らの理論形成を開始したということを忘れてはなりません。一言でいってしまえば、フロイトという人はつねにネガティヴにしか表記できないものに関心を示し、そこにポジとしての分析や理論をうち立てようと格闘しつづけた人だと言えると思います。フロイトがドイツ語の「unheimlich（不気味な）」という、どちらかというと漠然とした気分を表わす、しかもやはり un-という否定の接頭語を冠した言葉に特別な関心を寄せたことなどもその一例といえます。

（出典　小林敏明『フロイト講義（死の欲動）を読む』（せりか書房）なお、問題作成上、一部省略してある。）

**問１**　空欄［あ］～［え］に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

あ　①　ところで　②　なかでも　③　むろん　④　つまり

い　①　しかし　②　だから　③　ちなみに　④　ただし

う　①　あるいは　②　といっても　③　たとえば　④　さて

え　①　なぜなら　②　ところで　③　したがって　④　むしろ

**問２**　空欄［A］～［D］に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

A　①　例外的　②　現実的　③　逆説的　④　個人的

B　①　歴史的　②　分析的　③　時間的　④　可逆的

C　①　合理性　②　科学性　③　実証性　④　実体性

D　①　包括化　②　構造化　③　象徴化　④　先鋭的

**問３**　本文中、次の一文が省略されている。（①）～（⑤）のどこに入れるのが最も適当か、番号をマークしなさい。

ここでは、どういう言葉がそれに当たるかをいちいち数えあげる作業は省きますが、大事なことは、こうした否定の接頭語を冠した諸概念のなかに、その後ドラスティクにその意味内容を獲得し、さらにそれを充実、変転させていったものが少なくないという事実です。

**問４**　――線「フロイトの切り開いた精神分析という分野」の説明として、最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

①　「意識」の対概念である「無意識」に人間の実存的本質を求めたのが、フロイトの精神分析である。

②　「意識」の外部に広がる人間存在の暗部、その「不気味」さを解明しようとしたのが、フロイトの精神分析である。

③　「意識」のネガとしての「意識されないもの」を起点として理論を打ち立てようとしたのが、フロイトの精神分析である。

④　思想や理論の歴史にあってこれまで素通りされていた人間の「無意識」にはじめて焦点を当てたのが、フロイトの精神分析である。

**問５**　本文の内容に合うものを、次の中から二つ選び、番号をマークしなさい。ただし、解答の順序は問わない。

① 「atom」とはもともと「これ以上分割されないもの」という語調を内包する言葉であったが、物理学の発展によって死語になってしまった。

② 死者はすでに死んでいるがゆえに死とはなにかと問うことができず、ここに生者しか死を問うことができないというパラドックスが成立する。

③ 「individual」は、社会に対する最終的な責任単位としての個人という意味を持ち、古代ギリシア哲学の影響下で形成された概念である。

④ 西洋的思考は自然科学、人文科学を問わず、これ以上分割しえないとされる概念を母胎として体系化される傾向にあり、この点が東洋的思考とは異なる。

⑤ アドルノは、言葉にならない現象に対して新しい言葉を付与する重要性を主張し、観念の体系化こそが「認識のユートピア」であると説いた。

⑥ ウィトゲンシュタインは、語ることのできないものを前に沈黙することを説いたが、語りえぬものを語ろうとする努力までも否定してはいなかった。

**Ⅱ**　次の**1**～**5**の説明に当てはまるものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

**1**　福沢諭吉の著書。
① 『文明論之概略』　② 『経国美談』　③ 『西国立志編』　④ 『西洋紀聞』

**2**　尾崎紅葉の作品。
① 『風流仏』　② 『照葉狂言』　③ 『不如帰』　④ 『多情多恨』

**3**　永井荷風の作品。
① 『パリ燃ゆ』　② 『ふらんす物語』　③ 『アメリカ素描』　④ 『倫敦塔』

**4**　川端康成の作品。

① 『春昼』　② 『吉野葛』　③ 『古都』　④ 『旅愁』

**5** 文学史上、戦後派に属すると言われる作家。

① 太宰治　② 大岡昇平　③ 庄野潤三　④ 直木三十五

**Ⅲ** 次の空欄 **ツ** ～ **ニ** に入れるのに最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

**1** **ツ** であっても心に響く言葉はある。

① 不言実行　② 片言隻語　③ 言語道断　④ 枝葉末節

**2** パートナーとはいえ、**テ** であると感じれば対話が必要である。

① 公平無私　② 同床異夢　③ 風光明媚　④ 豪放磊落

**3** 宇宙の **ト** を理解することはできない。

① 泰然自若　② 白砂青松　③ 縦横無尽　④ 森羅万象

**4** 彼女の動勉さや **ナ** ぶりを知らない人は誰もいない。

① 博覧強記　② 離合集散　③ 一衣帯水　④ 不易流行

**5** 人の行いは **ニ** をもって報いられるとは限らない。

① 信賞必罰　② 勇猛果敢　③ 一騎当千　④ 不即不離

**Ⅳ** 次の**1**～**5**の傍線部と同じ漢字を含むものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

**1** 阪神タイガースがゲバヒョウを覆して首位に立った。

① ヒョウノウをねん挫部分にあてる。

② 彼は本当にヒョウジョウ豊かな人だ。

③ 一ピョウの重みの解消を目指す。

④　お店のヒョウカを高く保つ工夫を考える。

**2**　思い通りにいかない、生活が苦しいさまをフニョイという。

①　喧嘩がニンジョウ沙汰にならなくてよかったね。

②　「ニョウボウ」と「奥さん」と「妻」の使い分けを考える。

③　弟がトツジョ、陶芸家になると言い出した。

④　京都市内でもマイコさんを見ることは少なくなった。

**3**　カンワキュウダイ、本題に戻ろう。

①　カンカクを開けて並ぶ。

②　弟がサイナンカンの高校に合格した。

③　カンランセキで番組の収録に参加する。

④　商店街がカンサンとしている。

**4**　世の中はエイコセイスイを常とする。

①　資源のコカツは深刻な問題である。

②　コウ常的な成果を期待されている。

③　権力をコジする。

④　チョウコウゼツをふるう彼を止めることはできない。

**5**　イベントをきちんと終えるためのゼンゴサクを練る必要があるだろう。

①　冒険の末、ゼンジンミトウの地にたどり着いた。

②　小説家を志したのは、ジュウゼンから創作活動に夢中であったからだ。

③　サイゼンの手段を考える。

④　急ぐことのない、少しずつ進むゼンシンテキな改革が必要だ。

**解答**

**Ⅰ**

**問1**

**あ**

3

**問2**

**A**

1

**B**

1

**C**

4

**D**

4

**問3**

3

**問4**

3

**問5**

2、6

**Ⅱ**

**1**

①

**2**

④

**3**

②

**4**

③

**5**

②

**Ⅲ**

**1**

②

**2**

②

**3**

④

**4**

①

**5**

①

**Ⅳ**

**1**

④

**2**

③

**3**

④

**4**

①

**5**

③